



# ららぽーと通信

Lullaby News

2026年  
新春号

令和八年  
あけまして  
おめでとうございます



画／大野隆司

## 【目次】

### ■ 特集「命のルーツ」

小笠原（高瀬）露一宮沢賢治をめぐる女性

松永先生の思い出

命を愛そう

### ■ 連載／わらべうた 童謡 詞華抄13

東西「子どもの遊戯」

### ■ 連載／子ども虐待は、今 チャイルド・デス・レビュー

菊池 弥生 …2

近藤 征治 …4

前田 真澄 …8

尾原 昭夫 …10

川崎 二三彦 …14

### ■ 連載／日本子守唄紀行

「八雲が聴いた子守唄」

### ■ 連載

「ゆうパック心も体もときめいた好き一日」

### ■ 連載／直島便り

「八十年後の新しい年に」

### ■ 活動報告

### ■ 寄付者名簿

鵜野 祐介 …16

蒂津 良一 …18

山根 光恵 …20

…21



令和8年

ららばい通信 新春号を  
お手元にお届けさせていただきます。

あけましておめでとうございます

「正」は改まる、はじまりという意味「正月」はその最初の月となります。

昔は1月全てを正月と言っていたようですが現在では1月1日から3日までが正月

とされています。

農耕民族だった日本人が前年の豊作に感謝し、今年の豊穣を年神様に願うという行事でした。日本は八百万の神がいて、寺や神社に家族がそろってお参りに行くが通例でしたが、さて現代では家でひつそり正月を迎えるという方の方が多いのではないかでしょうか。元旦の初もうで、一日の書き初め、初夢（この年初めて見る夢でその年の吉凶を占いました）七日の七草かゆ 十一日の鏡開き 十五日の小正月（正月飾りを焼く）など二連の行事をこなすという家庭も少なくなってきています。時代も生活習俗も変わってきたので仕方ないとと思う反面、自然の四季と古くからある多くの行事のつぶらいは我が家に取り入れる「昔への畏敬」を持ちたいと思うようになりました。老いてなつかしさの良さが思い出されたせいでしょうか。

ここ数年、我が家では孫も成人したので、大みそかに集まって手製おせちを作ることにしています。昆布はよろこぶ、数の子は子孫繁栄、八つ頭は出世願望、黒豆はまめに働きと…ぶつぶつ言いつ一人仕事の私の横で孫たちは焼き豚やサラダ、餃子とステップと現代風に勝手に取り組んでいます。年越しそばとお雑煮は私の受け持ち。台所はしつちやかめつちやかですが、すでに大晦日の我が家の恒例行事となっています。本当に家族が集つて迎える正月ができることが最大の新年です。この風景が多分どこかに思い出として残るもののような気がします。

みんなで作った料理は楽しく食べますが、忙しいからと娘から届いた豪勢なおせちは最後まで毎年多く残されます。私の正月料理も教わったわけでなく祖母や母のを見よう見まねで創ったもの、伝えるつもりはないけれどどつか多分誰かが作るようになるでしょう。行事は暮らしの中から生まれると年とともに実感、どんな正月になつても、それはそれで仕方なし、自分なりに納得していくしかないと、ただ私が仏様や神棚に手を合わせる姿勢だけは家族に記憶させたいと願っています。

日本子守唄協会 理事長 西館好子

# みんな明るい子どもたち

唄の  
ページ

## 「あるきましよう はしりましよう」

作詞…小林純一  
作曲…中田喜直

あるきましよう あるきましよう  
おでてをふりふり らんらんらん  
おうまのよう いちにいちに  
いちにいちに らんらんらん  
はしりましよう はしりましよう  
おでてをくるくる たつたつたつたつた  
こいぬのよう いちにいちに  
いちにいちに たつたつたつたつた  
とびましよう とびましよう  
おでてをひろげて たつたつたつたつた  
うさぎのよう いちにいちに  
わたしのむねのとびらを  
わたしのむねのとびらを  
こころのなごむことりの  
こころのなごむことりの  
ひらくたのしいしらべ  
ひらくたのしいしらべ  
うたはやさしいはな  
うたはやさしいはな  
ゆめよぶこえ  
ゆめよぶこえ

## 「はるよこい」

作詞…相馬御風

春よ来い はやくこい  
あるきはじめた みいちゃんが  
あかいはなおの じよじょはいて  
おんもへでたいとまつて  
おうちのまえの ももの木の  
つぼみもみんな ふくらんで  
はよさきたいとまつて  
いる



## 「ゆめよぶ春」

作詞…勝 承夫

わたしのまどにささやくうたは  
わたしのまどにささやくうたは  
こころのはるにうまれる  
こころのはるにうまれる  
うたはやさしいしらべ  
うたはやさしいしらべ  
うたはやさしいはな  
うたはやさしいはな  
ことりのこえ  
ことりのこえ



## 「東京新幹線音頭」

作詞…江戸川友太郎

東京はなれりや恋風切つてよ  
栃木 白河 会津の山ヨ  
柿の福島 飯坂温泉  
東北新幹線にのせて  
旅はみちのく  
走りましょはしりましょ  
青葉若葉の緑の里でよ  
伊達は仙台七夕まつり  
寺は松島瑞巌寺  
東北新幹線にのせて  
旅のみちのく  
走りましょはしりましょ  
南部あねごのお酌で飲んでよ  
鉛 大沢 花巻温泉  
馬の盛岡チャグチャグ馬っこ  
十和田 八戸 野辺地の海はよ  
出船 入船 霧笛を鳴らし  
家用青森函館港  
津軽娘の踊りでかこむよ  
三味の音色で手と手をつなぐ  
旅の情けで花が咲く

シリーズ 譜女ー祈り⑦ 新潟県上越市名立区

# 大河

国見 修二（詩人）

大河の流れのように  
尽きない苦悩の道

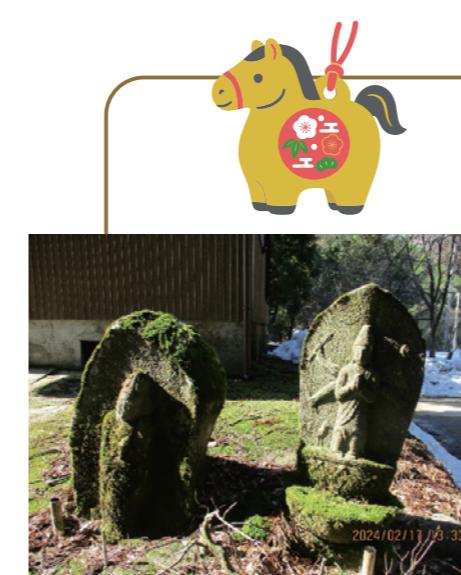
三味線弾いて

村人に喜んでもらった

所詮一人歩く道と知つてはいるが  
三人で鎖のように心つないで  
歩いてきた

〈生きることもいいものだ〉

詩集『瞽女ー祈り』より



瞽女は1年の約300日を旅したという。  
雨の日も雪の日も歩いて村人の前で歌った。

レーツを考える

人は突然一人で生まれ、一人で生きてきたわけではありません。

人类が生れた時から、長い長い歴史の時間の中に、吉吉的には、一瞬の登場として「わたし」が存在し生きているのです。私の存在は数えきれない過去がつまつた荷物を背負っています。ルーツは過去と未来の橋渡しの役目をしていくのかもしれません。

大抵は母や地域や故郷に眠っています。なつかしさ、惹かれるもの、影響を受け続けるもの、いつでも還れるもの、心の平安につながるもの、さまざまにその人の哀感とその時間に遊べる情感を含んで、忘れる事のできないもの。ルーツは関わる中に静かに血脉を流れる宝物といった捉え方ができるものなのだと思います。

私のルーツは生まれて育てた泣草という下田子供時代を送った幼年期の福島県小名浜の海。そして生き方に大いに影響を受けた両親といったところでしょうか。人混みと海鳴りと毎日の暮らし、なんかアンバランスなのに、何かにつけて私を支え続けてきた原点です。

一口に行つてしまえば「故郷」でしょうか。

子守唄協会初代会長のは松永伍一さんは「すべての男たちは母のいる故郷を原点として頑張れる」と言っていました。戦争で命を落とす瞬間にいう言葉も「お母さん」かの名野球選手のイチローさんもバットを振る瞬間に母を思うとおっしゃっています。命を繋いだ原点に「母」は不動でいるのだと思います。

つまりルーツを考えることは、誰も的人生の物語の始まりであり、「金だけ、今だけ、自分だけ」の刹那的になつた現代からの人間回避の原点になるのではないでしょうか。

宮沢賢治の生涯は、三十七年と短い。結婚歴はないが、女性に全く縁がなかつたわけではなく、心を動かされた何人かの女性が知られている。賢治は十八歳の時、蓄膿症手術のため盛岡市の岩手病院へ入院し、同じ年の看護婦・高橋ミネに心をときめかす。初恋の相手との結婚は両親に反対される。後になって賢治が結婚したかった女性は、三十二歳の時にお見合いをした伊藤チエである。賢治の友人・伊藤七雄の妹で九歳年下のチエは、知的で聰明、匂わんばかりに美しい女性といわれている。

この一年ほど前、賢治は高瀬露に出会つて、  
花巻町（現花巻市）出身の士族の家系である。賢治より五歳年下、一番目の妹シゲとは同級生である。大正七（一九一八）年、花巻女学校を卒業し、卒業後は花巻で小学校教師となる。十九歳の時、花巻バプテスマ教会で洗礼を受けた当時は珍しいクリスチヤンである。

寶閑尋常小学校教員だった二十五歳の頃、大

夏頃までの間、賢治が設立した「羅須地人協会」で手伝いをする。三十歳の賢治は、「気の利く美しい女性がいろいろと片付けたりしてくれて助かる」と喜ぶ。弟清六の話や露が知人に送った葉書によると、協会では賢治の大好きなベートーベンのレコードを鑑賞したり、賢治に讃美歌を教えて、オルガンを弾きながら讃美歌を歌つたり、二人の共通の話題は音楽だったようである。

ところが、露は賢治に惚れ込み、夜となく扈となく訪ねて来る迷惑な女生、返し品として市団

なく語れて来る迷惑な女性、返礼品として有り得るようなものをもらい、思慕の念を強める女性、押しかけ女房のような困り者という歪められたイメージが流布される。そのため、賢治は露を避けるようになる。賢治は頬に灰を塗つて「レープラ（ハンセン病）です」と偽つて面会したり、十日間位も「本日不在」の張り紙をしたり、座敷の押し入れに隠れていたという。

ある日、羅須地人協会でライスカレー事件が起きた。ある女人人が賢治を訪ねて来て、掃除をしたり、台所をあちこち探して、ライスカレーを

小笠原（高瀬）露路  
宮沢賢

遠野文化研究センター 研究員  
菊池 弥生



家事をしているその人を見てびっくりした。賢治は「この方は小学校の先生です」と紹介し、賢治はカレーライスには手をつけず、「私には食べる資格がありません」と言い、そのライスカレーを百姓たちに御馳走した。女人はひどく腹を立て、階下に降りて乱調子にオルガンをぶかぶか弾いた。賢治は「止してください」と言つてもやめ

な話が残っている。この女人が高瀬露である。昭和二（一九三七）年六月、露は賢治から「女人では来てはいけません」ち別れを告げられる。露という女性は、古い慣習や世間體にとらわれず、自分の愛情を表現できる積極的で進歩的な女性だったといえる。露は賢治を尊敬しており、賢治も露を大切な女性と思っていた時期がある。しかし、賢治は周囲からの誤った情報や自身の禁欲主義などにより、拒絶という不本意な形で終止符を打つたと推測される。

野の南部藩の上級士族と結婚し、小笠原露となる。仲人によると三十九歳の外語学校を出た英語の先生ということだったが、夫の牧夫は南部神社の宮司であった。そのため、結婚後は宗教の違いなどがあり、お互いにいろいろと大変だったようである。花巻から上郷尋常高等小学校（現遠野市立上郷小学校）に転勤する。翌年、賢治が病没。露は賢治の七回忌に際し、賢治を偲ぶ短歌を数首詠んでいる。これらにより、誰にも語れない露の悲しい境遇や賢治を師として慕う心情が伝わってくる。

オツベルに虐げられし象のごと

いく度か首をたれて涙ぐみみ姉  
告げなき心



を表明する研究者たちが出てくる。同年、七尾短期大学教授カトリック伝道士の上田哲は、「高瀬の言い分は聞かず一方的な情報のみを受け入れ、いわば欠席裁判的に悪女と断罪しているのである。賢治もまた、彼の耳に入る誤伝に基づいて彼女を避け、確かめもせず彼女に対応したと思わ

れる節がある」と再検証する論文を発表する。

更に上田は、「彼女は生涯一言の弁解もしなかつた。この問題について口が重く、事実ではないことが語り継がれている。とはつきり言つたほか、多くを語らなかつた。これは彼女がキリスト者であつたことによるのかもしれない」と推測する。しかし、露の親族によると、弁解や反論をしなかつた本当の理由は、宮沢家という大きな存在があつたこと、賢治の妹のシゲと親友であつたためと語つていたそうである。一方、遠野の嫁ぎ先や花巻の実への影響なども配慮した結果であつたかも知れない。

上田に続き、平成八（一九九六）年、遠野小学校と青笹小学校で露と同僚だった遠野物語研究所研究員の佐藤誠輔も論文を発表する。「私と妻は

晩年の小笠原露と同じ小学校に勤めたことがある。既に子供たちを育て終え、養護教諭となつて、いた彼女は、ひとの悪口を言わない教師として、

同僚たちから「目をおかれていた」と露の人柄を語る。また、「露の口からただの一度も宮沢賢治のほんの一言さえ聞くことがなかつた」とも証言している。

最後に、佐藤は露の隣家に住んでいた人から、人づてに聞いた話として、「露先生がたつた一度、宮沢賢治を口にしたことがあるよ。よほど嬉し

いことでもあつたのかな。『わたしね、ひよつとす  
ると賢治さんのお嫁さんになつたかもしけ  
ないんだよ』とね」と結んでいる。波乱万丈の人生を送つた露だが、実は普通の女性であり、心を許していたお隣さんに語つた若い頃の大切な思い出は、今後の賢治の研究において新資料になるであろう。

最終的に、賢治は死後、聖人君子として祭り上げられ、神格化される存在となつた。一方、勇敢にも賢治に愛を表現した露は、汚名を着せられたまま、死後も億女伝説が語り伝えられてきた。近年になつてようやく小笠原(高瀬)露についてある。

松永先生は私の郷里福岡県三潴郡大木町の出身の詩人です。

その他農民詩や子守唄の研究でも日本の第一人者であります。

が、私にとっては中学校の恩師、そして生涯を通しての自分の指針を示してくれた大恩人、その思ひは今も変わらず「先生」への尊敬と身近な親しみは今も全く変わることはあります。

見事な教育者であつたと思います。恩師「松永先生」の思い出は年を経ることに深くなり、私は「その生徒」として今も生徒のままでいます。

松永先生は当時八女高校を卒業すると同時に代用教員として花宗中学校にやってきました。私は先生の下で詩を教わり、雑誌を出し、そんな文化活動室を持つていたのです。

先生は幼い時から文学

少年だったそうです。そんなたゞまいが全身から感じられました。物静かで、いつも落ち置いていて、柔らかな声で、ちょっとささやくように話します。この姿勢死ぬまで変わりませんでした。

いことでもあつたのかな。『わたしね、ひよつとすると賢治さんのお嫁さんになつたかもしけないんだよ』とね」と結んでいる。波乱万丈の人生を送つた露だが、実は普通の女性であり、心を許していたお隣さんに語つた若い頃の大切な思い出は、今後の賢治の研究において新資料になるであろう。

最終的に、賢治は死後、聖人君子として祭り上げられ、神格化される存在となつた。一方、勇敢にも賢治に愛を表現した露は、汚名を着せられたまま、死後も億女伝説が語り伝えられてきた。近年になつてようやく小笠原(高瀬)露についてある。

最終的に、賢治は死後、聖人君子として祭り上げられ、神格化される存在となつた。一方、勇敢にも賢治に愛を表現した露は、汚名を着せられたまま、死後も億女伝説が語り伝えられてきた。近年になつてようやく小笠原(高瀬)露についてある。

ての研究が進み、再調査をする研究者たちの論文や書作が発表され、露の本来の人間性と名譽が回復され始めている。

ム」が10月25日から11月2日まで行われた。フォーラムでは子守唄研究家としての松永氏に焦点を当て、親交のあつた人を招いて、座談会とコンサートが大木町総合体育馆内「こっぽーとホール」で開催された。初日

25日は日本守唄協会理事長の西館好子先生を中心に行なわれることになりました。西館先生の司会で前半はピアニストのはせがわふさことさんの伴奏で歌手川口京子さんの子守唄。

後半は歌手・松原健之さんと詩人・国見修二氏、松永伍(文学保存の会会長)鳥取英記氏と近藤の5人で「伍」の子守唄研究の功績を振り返りながらの座談会を行つた。26日のコンサートでは、西

館



小笠原(高瀬)露  
写真提供 佐藤美智江

## 松永先生の思い出 — GOICHIフォーラム 座談会を終えて —

画家 近藤征治

大木町制施行70周年記念事業  
GOICHIフォーラム



大木町制施行70周年を記念し、大木町出身の詩人で評論家の松永伍(1930~2008)を顕彰する「GOICHIフォーラム」

参加者：近藤征治 国見修二 鳥取英紀  
松原健之 西館好子

帽子で野の道を歩くという風景の中に先生の原点があるようにも私は思いました。

土手でしようかね、背後に広がる九州独特の夕焼けや青空の中に浮かび上がるシルエット。ふるさとや母や草花を感じながら、自然と一致した日常が松永先生の感性を育てる根があったよう気がします。国見さんは持つていて「姿勢」ではなく、「詩性」の持ち主と称していましたが。私は、別で詩ではなく「絵」の世界に心を誘わされました。

書いた一枚の絵を先生は黙つてある展覧会に展出し、それが賞を取りました。

びっくりしたしうれしかつたです。もともと好きで書いていましたが、自分を表現できる心地よさが、人様に認められたこと、そのきっかけを松永先生が見つけ導いてくれたと思っています。「征ちゃん絵ば書くがよか」とやさしくいわれました。

私の長兄は実業家になりましたが子供のころからお前は日本のゴッホになれなんて本気で言つたこともあります。松永先生の言葉は追いつ打ちをかけて胸に響きました。

それ以来私の生活から「絵を描く」ことが無くなつたことはありません。

画家になろうといった気持ちではなく、絵を描くことを生業とする時期もなく絵は自分にとっての心の支え、癒し、無心、といった精神的な友であり続けました。今も多分これからも絵筆を話すことはありません。

もうお一人松永先生を偲んでフォーラムで発言なさつた鳥取英紀さんも先生の教え子の一





人、詩を先生に教わりたった二行の詩が先生の推薦で賞に入ったことを忘れず、今も心の支えとしていらっしゃるとお話をされました。

「三行の詩はどんな詩でしたか」と西館さんに聞かれて即お答えしていました。

○ 縁ありて人生たのし

松永先生は人の出会い縁についての内容の本が三冊に書かれていますが、この度のGOICH-FOURAMに出演された皆様も松永先生を通じて縁のある方々ばかりです。先生が天界から繋げて下さったのだと思っております。これからもご縁を繋ぎ続けていきたいと思います。

○ 大木町はどんなとこ

大木町は筑後平野の一角で有明海の干拓が土壤を豊にした米どころであり、大木町誕生の頃までは敷物莫産の蘭草栽培も盛んでした。

イチゴ他の農産物、近年ではキノコ栽培が全国的に人気となっており、経済的にも豊かなところです。

気候も温暖で人々も心豊かで優しく明るい。

○ 大木町誕生と松永伍一

昭和27年(1952年)花宗中学校が誕生し、松永伍一先生も22歳の時花宗中の代用教員となりました。昭和30年大莞・木佐木・大溝村が合併し大木町が誕生しました。町民は大喜びの中あらゆるイベントがありお祭り騒ぎ、私はその時の子供相撲大会に出場したことを今でも鮮明に覚えています。

○ 大木町誕生と松永伍一

八女高校の先輩後輩の関係にある五木寛之さんと松永伍一がともに愛した歌手の松原健之さん。その人柄や才能をもつてまた愛される要因を兼ね備えていられるのは十分理解できます。私も

ら感謝申し上げたいと思います。本気になつて動く人がいて大きく何かが動くことを心強く感じました。

世界的な画伯でいらっしゃる野口忠行さんも会場から発言くださり、ペル・に行くきっかけを頂いた松永先生のお話を下さり、その心を育む筑後地方の文化の豊かさや郷土愛が根にあると締めてくださいました。

松原健之さんと子守唄

八女高校の先輩後輩の関係にある五木寛之さんと松永伍一がともに愛した歌手の松原健之さん。その人柄や才能をもつてまた愛される要因を兼ね備えていられるのは十分理解できます。私も

うたに込められた思い、ましてこの子守唄の研究家の第一人者である松永先生の子守唄の詩を朗読して、母への思いが故郷や人を愛する原点になつてていると話されました。

○ 子もりうた 松永伍一

かあさんのいのちの暗い湖から光を求めてこの世に生まれてきたあなたかけがえのない私の天使 苦しみぬいて「かあさん」になった瞬間 一粒の真珠の涙がこぼれました メロディにはまだ遠い夜明けの契りうた 五線紙が彩られるのはこれからです あなたがむずがつて眠れぬ夜に あなたを抱いた温もりの中で あなたに流れ星を教えあとに

● 松永伍一生家を訪ねて

江戸の中期頃から松永家は庄屋豪農「油屋」の屋号でよばれています。伍一は幼い頃「油屋のジョン」と呼ばれていたそうで、ちなみに白秋はトンカジョン(長男)です。

時代も移り変わり現在では当時の面影は殆どありませんが甥御である松永家継承者の松永一完様が当時を偲ぶ数点を説明して下さいました。立派な梅・松の老木、松永先生が建立された「お兄さん(戦死)の記念歌碑」が当時を思い起こさせるように凛として庭に立っていました。この長男が文学通で歌など詠んでいて柳原白蓮と親交があったということでした。



松永伍一文学  
記念碑前にて

## 「イベント後の記念館訪問など」

### COLUMN

フォーラムを終えた翌日、西館好子理事長と国見修二氏と二日間居残り、隣の大川市にある古賀政男記念館、柳川市の北原白秋記念館、その他を訪問しました。

#### ●古賀政男記念館

記念館館長・山田永喜氏(古賀メロディギターアンサンブルリーダー、野口画伯教員時代の教え子)直々、ご案内説明をして下さり、その上、野口画伯が描かれた古賀政男肖像画の前で、古賀メロディ名曲「影を慕いて」「人生の並木道」等、ギターを抱えて哀愁深く爪弾いて下さいました。感動の余韻が残るひと時、古賀メロディーの曲の背景や苦難の人生の中での曲作り、最後はご養子となられた山本丈晴、富士子(女優)夫妻との穏やかな親子関係に心安らかな晩年であったということも自叙伝に書かれていました。

#### ●北原白秋記念館

元北原白秋記念館館長・大橋鉄雄先生が西日本新聞に「白秋うれしかりけり」記事連載されていて、それを読まれた西館先生が大橋先生とは非お会いしたい意向だったので前もって記念館でお会いしました。展示資料を見ながら、白秋の生涯を詳細な説明でご案内いただきました。大橋先生の気さくでユーモアあふれる話しぶりが印象的で有意義な時間を過ごすことが出来ました。現館長西田江利子さん、学芸員高田杏子さんの暖かなご案内とお話を白秋が柳川をどんなに愛していたかが伝わってきました。

#### ●松永伍一生家を訪ねて

江戸の中期頃から松永家は庄屋豪農「油屋」の屋号でよばれています。伍一は幼い頃「油屋のジョン」と呼ばれていたそうで、ちなみに白秋はトンカジョン(長男)です。

時代も移り変わり現在では当時の面影は殆どありませんが甥御である松永家継承者の松永一完様が当時を偲ぶ数点を説明して下さいました。立派な梅・松の老木、松永先生が建立された「お兄さん(戦死)の記念歌碑」が当時を思い起こさせるように凛として庭に立っていました。この長男が文学通で歌など詠んでいて柳原白蓮と親交があったということでした。

#### ●柳川の川下り

「どんこ船」は有名である。気温が低く寒い日でしたが方言丸出しの船頭さんの話が面白く、柳川城の堀割りを下り左右の景色をみると、勝手は飲み水にも使われ高田水汲みの川べりの石段に猫がのんびり寝そべっていたり、鳥が置物のようにと止まっていたりと、飽きることはありません。情感を感じるあつという間の1時間でした。



柳川川下り「どんこ船」にて  
楽しむ

人、詩を先生に教わりたった二行の詩が先生の推薦で賞に入ったことを忘れず、今も心の支えとしていらっしゃるとお話をされました。

「三行の詩はどんな詩でしたか」と西館さんに聞かれて即お答えしていました。

○ 魚突きに行つた  
何もかもが魚の姿に見えて  
きえていつた

のでしようか。

なんか当たり前なのに確かに子供の情景がほほえましい。

松永先生の目は純な子供たちに「詩」や「絵」という心を教え、導き、生きる力が湧くよう育てたまさに先生「教育者」であったと私は思っています。

松原さんの名前の由来はお二人のお名前から一字ずつを頂いてつけられたそうです。五木さんは歌詞を提供し、松永先生は芸能界への教えやこまごま日常の事を大学ノートにびつしり書いて渡すほど愛していられたようです。

歌手の松原さんは演歌や叙情歌、そして子守唄を歌います。

うたに込められた思い、ましてこの子守唄の研究家の第一人者である松永先生の子守唄の詩を朗読して、母への思いが故郷や人を愛する原点になつてていると話されました。



記憶のなかに咲きつづける祈りの楽譜です  
「愛」という言葉はいりません  
まさに松永先生の見事なメッセージだと私も思いました。

登壇者からは、「松永さんの詩には、優しさと葛藤(影)が共にある。人を思う優しさがあるからこそ、矛盾や痛みにも敏感だった」、「子守唄は、愛情だけでなく、苦しさや孤独も込み込む」、「出生、母親、兄との関係性が原点にあるのではないか」などの言葉が印象的に語られました。また、写真や思い出を交えた語りの中で、子守唄が単なる懐かしさではなく、「生きる力」として次世代に伝えるべき文化であることを改めて実感する時間となりました。

改めて、自分を育ててくれた原点がいかに大切で大きいものかを、再認識させていただいたフォーラムでした。

○ この企画、大木町関係者に感謝

この企画においては、未来を子供たちへの思いから広松町長様が前向きで精力的に行動されたことをつぶさに感じておりました。そして運営に関しては北原教育長、大木町地域づくり課の職員の皆様の並々ならぬご尽力によつて、このイベントが滞りなく成功裏に進行したことに心から感謝の意を表します。

# 命を愛そう

助産師 前田 真澄



子どもがまだ幼い時、シングルマザーになりました。急遽お給料がいただける看護の職業に就いたのですが、産院の院長先生から「これからは、助産師が必要になる時代だから、免許を取つておくといいよ」とアドバイス頂きました。確かに、将来を考えれば、仕事をしながら学べる環境にあつたのですから、よし、頑張つてみようと思いました。女性が一度は通るお産への道、自分も一度は経験したけれど、興味深いし、そのお産にかかわる知識を持つのも悪くない。未来永劫女性とお産とは切つても切れないですから、やりがいがあるぞと奮起しました、

何しろまだ子育て中でしたから大変でした。両親や子どもの保育園の皆さん協力、沢山の人たちに励まされ助けられ、看護婦から助産師になるにまる5年かかりました。長いですが、必死でよく頑張ったと思いますよ。

で、分かったことは、お産という興味深い世界は知れば知るほど深いそして楽しい。やはり生みの苦しみを笑顔に変えて人間の誕生の笑顔に変えられるのですもの。まあ、多くの人はお産の仕組みを勉強なんかしていません。

痛みとか突発的に来る出血などに狼狽します。びっくり仰天の時間を味わうのが普通、本当に経験したからわかりますが、初めての経験に女性の女性たる道がはつきり見えてきた感じが私はしました。

私たちは女性ですが、女性という体の仕組みを案外知らないということに気が付きました。でもだんだん、助産婦の仕事をしていくあるときからお産、分娩という神秘な仕事に就いたことに誇りさえ感じるようになつてきました。私のいる分娩室はまさに「命の宝庫」といった高い命の希望と未来を生み出す場だといった高揚感がありました。

女性の身体の持つ神秘について、お産から未来が見えることを、妊婦に教え伝えたいと気付きました。昔からお産は忌、不潔で不浄なものがついて回りました。性の結果の生理的なことに立ち向かう妊婦は家から遠ざけられ、汚いものであるかのようになりますが、実は妊婦が自分のお腹を見るように扱われ、そのことに苦しむという時代が長く続きました。今はそんなことはありません。



解ること、体の機能を探っていくことが大切ですね。そして妊婦さんのそれぞれの個性に合つた出産の場をプロデュースしていくことでしょうか。

助産師の役割は陣痛、出産までの時間の中で、妊婦に気持ちを落ち着かせ妊婦の体に合った道程を作つてあげることだと考えています。例えば、今はやりの夫の立ち合いですが、すべての妊婦がそれを望んでいるわけではありません。妊婦が自分の体を使うわけですから、立ち合いを拒む人がいても当然です。妊婦さんの多くはさまざまな不安を抱えながら分娩室に入りますから、「ありのままで大丈夫ですよ。」って背中をさすって安心していたら大丈夫ですが、子宮口の状態や陣痛の具合を確認しながら産声をあげるまでの段階を一つひとクリアできるように、優しく導いて安心してもらおうのも助産師の役割だと思っています。

新しい命と向き合う感動がなければこの仕事は長く続けられません。命の素晴らしさを身体で感じ取る、このことを妊婦にどう伝えよう。

お産のときの緊張と弛緩の繰り返しは「波の寄せ返し」と同じで、繰り返すことのよつて徐々にエネルギーが高まつていきます。つまり緊張と同じくらいの弛緩がないとエネルギーにならないのです。妊婦さんはこの運動を自ら体験することによって、命の素晴らしさを感じ取つてほしい。

お産は「命の愛おしさ」を教えてくれる究極の場。命を愛し、未来へ繋がついくことを望んでいます。

## お産から学ぶ性教育

お産時に伴う排泄も汚いと考える妊婦さんが多いのですが、それは当たり前のことで汚いもの

そんな祈りを持つようになり、なんと気づいたらなんとこれまで千五百人以上の赤ちゃんをとりあげてきました。まさに分娩室は「生命の宝庫」奇跡の宝物の場所でしたが私自身にとっては輝かしい心地よい居場所であつたということです。

突如舞い降りたメロディー「夢をみておいで」十数年前、ふとわたしの頭の中に舞い降りたメロディーがありました。たさんのお産を通して私に下りてきた恵みだったのでしょうか。その物語は命の物語りでもありました。やがてその物語りは曲や絵本となつて広がつていきました。皆様のお手元に届くことを願つています



前田さんが仲間と発行した  
音楽を感じる絵本「夢をみておいで」

ではないと説明します。そもそも尿や便を出る場所は性行為をするところと差異はありません。そう考えれば「汚い」という認識もずいぶん変わってきますし、このようながらだの仕組みや命の尊さ、人間の身体はとても素晴らしいものを備えているのだと、子どもの頃からきちんと教えていれば、衝動におもむくまま性行為に走る若者はいなくなるのではないか。また、自分の身体は自分でよく知つて恵よく知つておくことの大切さも性教育に大切な一項目です。命を守ることは自分の命を心身のありようを知つておくところが基本だと教えていくことではないでしょうか。

基本的に妊婦はお産の知識がなくとも出産はできるんです。お産は身体の機能を使いながらする事ですから、頭の中で余計なことを考えたり、知識を入れたりするより、身体に従つた方がいい場合が多くあるんです。日本の産院の多くはベッドで仰向けになる姿勢(仰臥位)をとっていますが、実は妊婦が自分のお腹を見るような姿勢、四つん這いや座位のほうが赤ちゃんは出やすいんですね。

助産師が知つておくべきことは、体の仕組みを理



# 東西「子どもの遊戯」

わらべうた研究家 尾原 昭夫

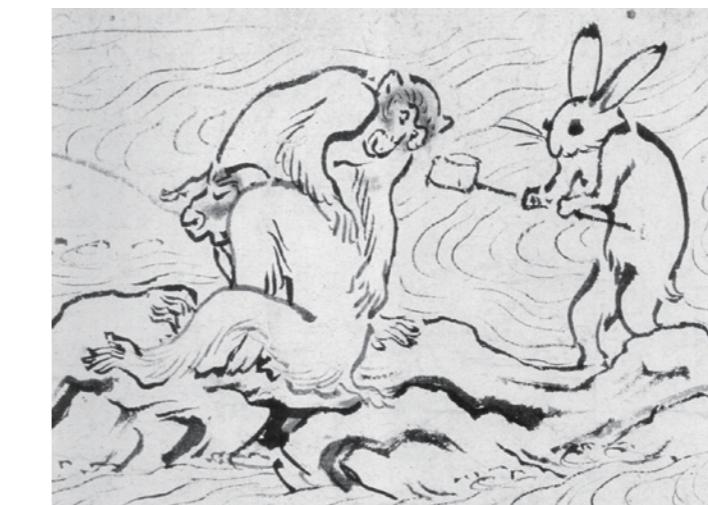
わらべうた童謡詞華抄13



歌川広重画(江戸後期) 筆者蔵  
風流をさなあそび



お守 鳥獸人物戯画断簡



いたわる 鳥獸人物戯画(平安時代後期)  
日本の絵巻6 中央公論社

## 全世界の子どもに平和と希望を

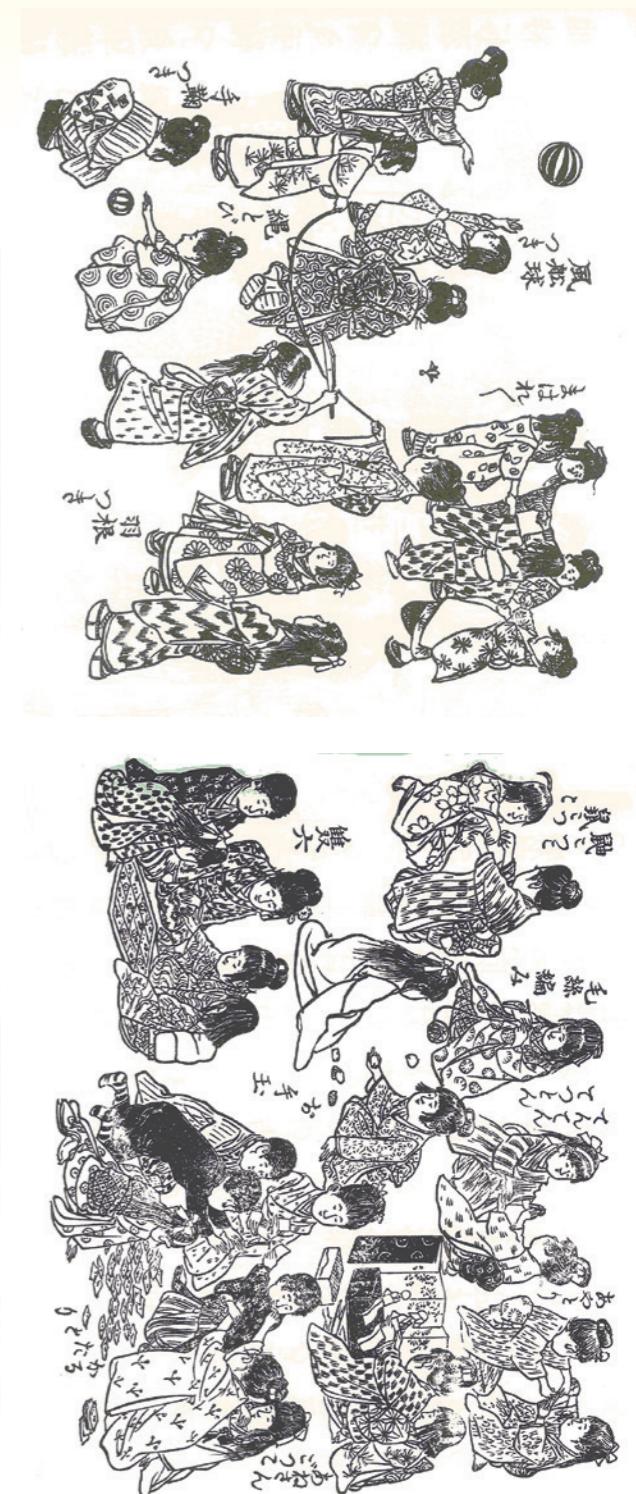
「条約国は、子どもが、休息しあつ余暇をもつ権利、その年齢にふさわしい遊びおよびレクリエーション的活動を行う権利、ならびに文化的生活および芸術に自由に参加する権利を認める。」(第31条)「戦争にまきこまれた子どもを守るために、できることはすべてなければならない。」(第38条) 国連 子どもの権利条約



「子どもの遊戯」  
Pieter Bruegel (16世紀) ウィーン美術史美術館蔵 世界の名画606



松本洗耳画 東京風俗志(明治時代) 筆者藏



12

子ども虐待は、今

チャイルド・デス・レビュー

子どもの虹情報研修センター

川崎 一二彦

父の死

私の父が死亡したのは昭和最後の日。だから葬儀は平成になって執り行われた。正月はごく普通に過ごしていたのに、急に容態が悪くなり、家族に見守られての最期だった。

「が」臨終です」

主治医が声を落としてそう告げると、真っ先に遺体に取りすがつたのは母であった。

「お父さん、アキラのところへ行つて私たちを守つて下さいよ」

これだけは是非とも言つておかねばならぬといつた切羽詰まつた調子で話しかける母の姿に、正直言つて、私は驚きを禁じ得なかつた。アキラは私の兄に当たる人物で、私がこの世に生まれる前、自宅の裏にあつた小さなお堀にはまり、5歳で水死していたのである。

以来40年、私の知る限り兄のことが話題にのぼることはなかつた。しかし母は、またおそらく

父も、アキラのことは片時も忘れていなかつたのだろう。我が子の死が、子どもの死がいかに重いのかを思い知らされた瞬間であった。

子ども虐待防止学会ほっかいどう大会

さて、今年の子ども虐待防止学会学術集会は、北海道で開催された。前日入りして新千歳空港に降り立つと、11月半ばで早くもみぞれ混じりの雨。肌寒さを感じるなか、約3千人が参加して熱氣あふれる集会となつた。メインテーマは「子どものあわせ みんなのあわせ」考え方による大谷美紀子弁護士による基調講演など、興味深いプログラムが日程に集会だった。

そして私も、いくつかの企画に参加させてもらつた。その1つは教育講演「虐待死から何を学ぶのか」。また、「チャイルド・デス・レビューをもう一

度考えてみる」という企画にも登壇させてもらつた。いずれも子どもの死に関するテーマだが、ここでは、後者について紹介する。

チャイルド・デス・レビューとは

チャイルド・デス・レビュー（以下、CDR）は、簡単に言えば「予防のための子どもの死亡検証」であり、虐待死に限らず、事故死や内因死など全ての子どもの死を対象にしている。その目的は、死因究明や真実の追求ではなく、将来の予防策を提言することだ。

虐待防止学会では、この何年間か、わが国で

CDR劇団

その1つが、検証会議の具体的な様子を脚本に仕立てて披露する企画。ワーキングのメンバーが、架空県のCDR委員に扮して実際の会議の様子を演じるのである。脚本はメンバーの一人が執筆し、何度も練り直して完成させるのだが、今回は私も教育委員会職員の役で参加した。

発表の前夜と当日の早朝に集まり、2度にわたりて読み合わせをすると、万全の準備をして臨んだその出来映えはどうだったか。以下では、脚本の一部を紹介しながら、CDRについて考えてみたい。今回創作したのは、子どもの泣き声でパニックになつた父親が、生後5ヶ月の女兒を激しく揺さぶつて死亡させた事例である。

「これからが、これまでを決める」

「スマスマセン、この事例は、すでに虐待死亡事例検証で検証されていると聞いています。もう一度CDRで取り上げる必要があるのでしようか」

「確かに、虐待死検証では事例が詳細に検討されていました。ここでは、赤ちゃんの“泣き”について、また揺さぶりの予防などの視点から話し合つてみてはどうでしょう」

こんなやり取りのあと、「赤ちゃんが泣き止まないシーンと揺さぶりの影響を解説した動画を乳児健診の際に見てもらつてはどうか」「動画のQRコードを母子手帳に貼り付けておけば父親にも見てもらえるのでは」などの意見が交わされた。また、警察官役の人が、「泣き声がひどく、『虐待が心配だ』という連絡を受けて家庭訪問したことがあります。赤ちゃんがアトピーで泣

いていただけでしたが、その方は、訪問されたこと自体にショックを受けていました」と話すと、児童福祉司に扮した人が「通告は、支援の必要な子どもに気づいた人が、児童相談所等に『支援してください』と連絡することであつて、決して親を責めるためではないんです」と説明し、話題は広がつていった。

「いろいろな話を聞いていて思ったのは、『これからが、これまでを決める』ってことです。私たちのこれからを取り組みが、亡くなつた5ヶ月の女兒のこれまでの命、この子が生きた証を示すような気がしたんです」

グリーフケア

会議は保護者支援についても取り上げた。

「父親への支援についてはどうでしょう。この人は、育児を引き受けたがゆえにパニックになり、揺さぶりをしたんです」

「そうですね、私はこれまで、父親は育児をする母を支える人だと思っていましたが、父の育児参加が求められる世の中ですから、父親を支えるアプローチが大切なんですね」

「ところで、事件を起こした父親はもちろん、お子さんを亡くされた母親も、このことは生涯忘れないはずです。辛い思いを抱えて生きていかねばならないこうした方々に、社会としてできることはないのでしょうか」

「そうですね。そんなご両親の思いを受けとめ、支援するグリーフケアが必要ですよね」

話題は、子どもを亡くした親たちのグリーフケアの話になつた。と、その時よみがえたのは、



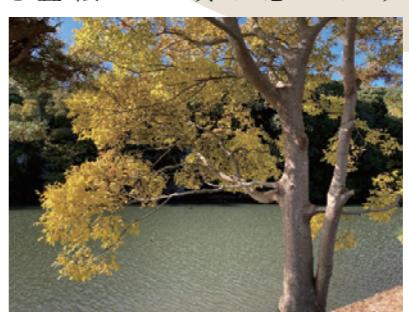
## 日本子守唄紀行

鶴野 祐介

(立命館大学教授／子守唄・わらべうた学会代表)

## 第15回 「八雲が聴いた子守唄「ねんねこお山のうさぎの子」」(島根県)

十一月末、錦繡の出雲路を訪ねた。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が著した「日本のわらべ歌」（『日本雑記』所収、一九〇一年）に関する論考を雑誌『現代思想』一一月臨時増刊号に寄稿したことがきっかけで、八雲が聴いた島根県の子守唄の背景について詳しく知りたいと考えた。



松江駅に降り立つと、鳥取・島根の山陰両県における民話や民謡・わらべ歌の調査研究の第一人者である酒井董美先生が迎えに来て下さっていた。最初に市街地から車で約二〇分のにある「出雲かんべの里 民話館」をご案内下さった。まず、八雲の代表作『怪談』に収められている伝説「耳なし芳一」を立体映像シアターで視聴した。次に、当館の語り部・安部光江さんから伝説「飯山狐」と八雲の怪談話「幽靈滝」の二話を酒井先生とご一緒に聞かせていただいた。安部さんの語りは、島根県内の客にも県外や外国からの客にも楽しんでもらえるよう、共通語と島根の土地言葉をバランスよくミックスさせた語り口で心地よかったです。また、語りを聴いた後に頂戴した野草茶と干し柿の味も格別だった。

それから街地へ戻り、酒井先生と別れた後、小泉八雲旧居と同記念館を訪ねた。記念館では、展示室の再話コーナーに地元出身の俳優・佐野史郎が朗読する「幽靈滝」の音声データがあり、聴き比べをした。松江への旅を計画されている方は是非、かんべの里と八雲記念館の両方に立ち寄られることをお勧めしたい。

：また、隠岐の母親たちが赤んぼを寝かしつけながら、この世でいちばん古い子もり歌をうたつていて、声を聞くこともできた。

ねんねこ お山の うさぎの子

なぜまた お耳が 長いやら

おつかさんの おなかに おるとき

びわの葉 ささの葉 たべたそな

それで お耳が 長いそな

その節が何ともいえず甘い哀調をおびていて、出雲や日本のほかの地方で同じ歌詞をうたつていて、だいぶ違っているようであった。『全訳小泉八雲作品集』第6巻 334-335頁)

一八九二年八月にセツと一緒に隠岐を訪れた八雲が「この世でいちばん古い子もり歌」と称した、「何ともいえず甘い哀調をおびて」いる子守唄のメロディとはどのようなものだったのだろうか？

酒井董美『島根のわらべ歌』(今井出版二〇二四)に収められた、鹿

足郡吉賀町柿木の伝承者・小田サメさんが歌つた次の子守唄の後半部

は、八雲の紹介した歌によく似ている。

ねんねんよ ころりんよ  
ねんねがお守りは どこ行  
野越え 山越え 里行た  
里のみやげに しなにもろた  
でんでん太鼓に 筏の笛  
でんでん太鼓を たたいたら  
どんなに泣く子も みなだまる  
ねんねんよ ころりんよ  
おととのお山のお鬼は なしてお耳がお長いの  
おかげのおなかにいたとき  
椎の実 椎の実 食べたさに  
それでお耳がお長いぞ ねんねんよ ころりんよ



翌日、松江駅からバスで北へ約一時間、日本海に面した島根町の「加賀の潜戸」を観に行つた。八雲もセツを伴つてこの地を訪れ、「これ以上美しい海の洞窟は見たことがない」と感激したと伝えられる。特に見たかったのが「旧潜戸」である。

亡くなつた幼子の魂が訪れるという場所と聞き、そこに沸き立つ潮風の唸り声の中に、子守唄の原像が聞こえてくるかもしれないと思つて眺望することができた。予想してい通り、それは幼子の魂が乞い焦がれる母の子宮への入口のシンボルに見えた。八雲も魅了したこの独特的景観こそ、出雲の神話や伝説の摇籃だと実感された。いつか遊覧船で訪れてみたい。



作品集第六巻所収『日本警見記』下巻「第二三章 伯耆から隱岐民話館」のデジタルアーカイブのサイトにアクセスして、サメさんの歌声を聴くことができる。「ドドレド レーミー ソソミミ レー」が繰り返されるシンプルな旋律で、「この世でいちばん古い子もり歌」と形容することもできそうだ。吉賀町柿木は山口県と接する島根県南西端の山間部で、北東端の海上にある隠岐島とは遠く離れている。但し、どちらも島根の文化圏の中心である松江から離れた地にあり、柳田国男の「蝦夷考」で有名になった「文化周囲説」に従えば、隠岐と柿木に同様の古い伝承が残つてゐる可能性もある。また、一八九八年生まれのサメさんがこの唄を耳にしたのは、八雲が隠岐で類歌を聴いてから十年も経つていい。それらを考え合わせると、サメさんの歌声に、八雲が聴いた隠岐の子守唄をダブらせてみるともあながち的外れとは言えないだろう。

だが、対岸の櫛島からその洞窟を眺望することができた。予想してい通り、それは幼子の魂が乞い焦がれる母の子宮への入口のシンボルに見えた。八雲も魅了したこの独特的景観こそ、出雲の神話や伝説の摇籃だと実感された。いつか遊覧船で訪れてみたい。



連載

帶津 良一

# 心も体もときめいた好き一日



コロナ禍で一旦激減した講演が少しづつ回復してきました。講演は私にとって、心のときめきの根元ですから、じつにありがたい話なのです。

二つの講演が重なったために、ときめき溢れることになった一日について報告したいと思います。一つはNHK文化センター町田教室です。講演時間は15時から16時30分まで。演題は、

ときめいて生きる「人生の幸せは後半にあり。

」89歳現役医師が実践

もう一つは西入間倫理法人会のイヴニングセミナーで、時間は18時30分から20時まで。演題は

『ホリスティック医学から学ぶ場のエネルギー』

「人生の幸せは後半にある、養生な生き方」

とあります。

演題の共通項としては、

人生の幸せは後半にあり。

で、二つの開催地が遠く離れているところに多少の不安がありました。が、わが病院の事務長さん、大丈夫!と太鼓判を押してくれたのでお引き受けした次第です。それにしても、道程の複雑さが私には重荷になりますので、町田市まで



禄は、恐らく平均寿命が40代でしたでしょうから、妥当というべきかもしれません。しかし、私は60歳以降を人生の後半と考えています。

私の60代は体力、知力は全然衰えてはいませんでした。それでいて女性の色気をこれまで強く感じるようになつたのです。女性の頬や首筋や二の腕に触りたくて仕方がなくなつたのです。同時に私自身がこれまでになく女性に持てるようになったのです。この人情の機微の変化こそ、人生の後半の特色と考えたのです。

と同時に人生の幸せな後半生を手にするためには、アンチエイジングなどはさらりと捨て去り、ナイスエイジングに徹することであるといふことを会得したのです。その時、私のイメージしたナイスエイジングとは、

老化と死とをそれとして認め、これを受け容れた上で、老化に対して楽しく抵抗しながら、自分なりの養生を果していき、生と死の統合を目指す。

というものでした。

老化といい死といい、これらは大自然の摂理ですから、アンチなどと言つても詮も無いことなのです。それよりはこれらを認めた上で、心のときめきに恵まれた、さわやかな日々を送つていけばよいのです。このような話に対する皆さんの反応は極めて鮮やかで、じつに充実した時間を過ごすことができました。

もう一つは西入間倫理法人会のイヴニングセミナーで、時間は18時30分から20時まで。演題は

『ホリスティック医学から学ぶ場のエネルギー』

「人生の幸せは後半にある、養生な生き方」

とあります。

演題の共通項としては、

人生の幸せは後半にあり。

で、二つの開催地が遠く離れているところに多少の不安がありました。が、わが病院の事務長さん、大丈夫!と太鼓判を押してくれたのでお引き受けした次第です。それにしても、道程の複雑さが私には重荷になりますので、町田市まで

とは何か。それは牛肉であるとの考え方から、すき焼を多用しているのです。若い頃はステーキも好きでしたが、年を取るにつれ厚いステーキが苦手となり、その分、すき焼が多くなったというわけです。そうして、すき焼がますます好きになってきたのです。

それから一人して電車を乗り継いで、小田急

の往復と、町田市から坂戸市を経て川越市にという復路に各一人ずつサポートーがつくことになりました。

病院からタクシーで大宮駅まで行き、東北新幹線自由席で東京駅まで、東京駅で、往路のサポートーである、友人のひさんと落ち合、二人して、いつもの東京駅近くの京料理店で昼食。生ビールの小ジョッキ一杯と、これまた、いつものすき焼小鍋を一人前。牛肉はもともと嫌いではないが、『養生訓』の

家業に励むのが養生の道

を範に、家業に励むためには、まず下半身の筋肉を弱らせてはいけない。そのためには、良質の蛋白質を摂らなくてはならない。良質の蛋白質

とは何か。それは牛肉であるとの考え方から、すき焼を多用しているのです。若い頃はステーキも好きでしたが、年を取るにつれ厚いステーキが苦手となり、その分、すき焼が多くなったというわけです。そうして、すき焼がますます好きになってきたのです。

それから一人して電車を乗り継いで、小田急

の往復と、町田駅へ着いたのが、2時20分頃。NHK文化センター町田教室では女性のH支社長さんがやさしく迎えてくれたものです。そこで往路のサポートーのひさんは役割を終えて単身帰路に。私は控え室で一息入れたあと、予定の15時丁度に教室に。小さな教室で14人の生徒さんが迎えてくれました。男女は半々で、いずれも中年以上の方々で、いずれの表情にも、えも言われぬ優しさが漂っています。

ああ、好いクラスだなあ!

と感動したものです。そして、H支社長さんが初めてからおわりまで同席していたところをみると、このクラスは期待のクラスだったのかも知れません。

まずは、

人生の幸せは後半にあり

から入りました。これは貝原益軒の『養生訓』の底流を流れる思想ですが、私は始めから大好きでした。それにしても人生の後半とはいからのことなのか。益軒先生は50歳以降を後半としていたようです。彼の生きた江戸時代の元

16時30分に講演を終えて教室から出たところ、なんと目の前に、うちの病院の運転手さんが坐っているではありませんか。一瞬にして現実に戻りました。私を次なる講演会場に運ぼうというのです。挨拶もそこそこに車中の人。運転免許証の無い上に方向音痴の私にはどのよう道を通つてどのくらいの時間がかかるのか皆目わかりません。ただ、講演開始18時30分までに到着して欲しいと願うばかりでした。高速道路を含めた暗い夜道をひた走り、坂戸駅前の会場になんとか時間前に滑り込んだものでした。打って変わって、こちらは大きな会場に100人以上の人々が詰め掛けています。そして倫理法人会というだけあって、比較的若い人も多いらしく、若々しい熱気が溢れています。

テーマはどちらも、人生の幸せは後半にありと、養生ですから、大筋では町田市のそれと変わりなつたのです。同時に私自身がこれまでになく女性に持てるようになったのです。この人情の機微の変化こそ、人生の後半の特色と考えたのです。

まだ科学がこれを解明していませんので、命についてまだエビデンスを備えた存在ではありませんが、医学である以上、命を主たる対象とする姿勢を崩してはなりません。そこで次の

そしてその生命場のエネルギーが命。何らかの原因で、そのエネルギーが低下したとき、それを回復すべく生命場に本来的に備わった能力を自然治癒力と考えました。さらにこの世だけではなく、あの世にも期待と展望をもつて、この世を生き切ることを、生と死の統合として、ホリスティック医学の究極としました。

講演が進むにつれ、会場の場のエネルギーはぐんぐんと上昇し、私の内なる生命場のエネルギーも体外に溢れ出たのです。そのエネルギーに背中を押されたのか、講演が終了しても、質問と発言は跡を絶たず、私の心のときめきも最高潮に達した感がありました。

そして、締めの食事会です。食事は中華のコースでしたが、生ビールとウイスキーのロックにあらためてときめき、終わって帰路につくに下半身がやけに軽くフットワークがいいのです。立ちっぱなしの180分のおかげで心だけではなく体までときめいたようです。いやあ、好き一日でした。

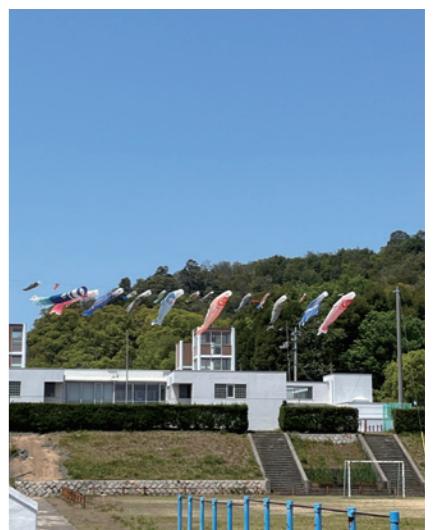
帶津良一 プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帶津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帶津三敬塾クリニックを開設。日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか?」「健康問答」など。その数は100冊を超える。

# 八十年後の新しい年に



南無庵 庵主 山根 光恵  
山口県長門市出身  
浄土真宗本願寺派 布教使



元気に泳げ直島のこいのぼり

2025年はあつという間に終わり、新しい年を迎えた。私が住むここ直島は、昨年は例年に増して慌ただしかった気がする。新しく直島新美術館ができたし、第6回となる「瀬戸内国際芸術祭2025」が開催された。私の住んでいる本村地区がメイン会場だったので、毎日人がいっぱい訪れていたこともあって、余計そう感じたのかもしれない。

それに最近、直島を舞台にしたゲームやアニメがあるようで、島のあちこちがファンにとっての「聖地」になっている。その聖地巡りを目的に若い人たちも多く訪れていたので、なおのこと例年よりも人が多かった。

そんな2025年は、あの戦争が終わって八年目の年でもあった。日本は今でこそ平和だけれども、過去にはみんなが苦しんだ戦争があたたことを忘れてはいけないと思う。

毎月、岡山県玉野市のお寺でお地蔵さんのよだれかけを作る集まりがある。そこで、私より少し年上の高知出身の方から、戦時の体験をうかが

うことがある。空から焼夷弾が雨のように降り注ぐ中、母親とともに逃げ回ったという話などだ。戦争を経験していない私たちにとって、その恐怖は、まるでテレビや映画の一場面を通して感じるもの。私は戦争が終わった時、やっと2歳になつたばかりだったので、戦争中のことも、戦争が終わった時のこととも何も記憶がない。そんな戦争中のつらい体験をすることもなかつた私が、この頃よく思い出すことがある。

私は6人兄弟の5番目で、昭和18年生まれ。弟は終戦後の昭和22年生まれだ。私が高校生になつた頃、家族揃つて夕飯を食べていると、母が突然、戦争中のことを語りだした。

「どうやらこの戦争はもうすぐ終わるらしい、という空気が世間に漂い始めた頃、日本が負けたら占領軍が来て、日本人は皆殺しにされるかもしない」という噂があった。その時、お兄ちゃんたちのように大きい子どもは捕らえられて、奴隸のように働かされることになるかもしれない。でも、みつちゃん(※私のこと)はまだ赤ん坊のよう

なものがだから、使い道もなく、どんな殺され方をするのかと考るだけで恐ろしかつた。ごみのように殺されるくらいなら、私が抱いて一緒に死のう。本堂の前の石畳の上に座り、阿弥陀さまの前で死のう——そう心に決めていたのよ。」母はそう語つた。それは、その時に一度だけ聞いた話である。

その後の母は「戦争が終わって良かつた。日本は負けて良かつた」というのが口癖であった。この頃は、口では「戦争はいけない」、「平和な国を作ろう」などというものの「八月や六日九日一五日」という句を見ても、何それ?と意味も分からぬてしまう。人間は本当に勝手なものだと思う。

その3つの大事な日が詠まれた有名な句だが、なんと、国は徐々に落ち着きを取り戻し、人々の暮らしも知らず知らずのうちに豊かになつていつた。喉元過ぎれば熱さを忘れる。だんだん「この豊かさはあたり前」という気になつて忘れていく

かくいう私も知らなかつた。この句のことは、例の高知出身の先輩が「ららばい通信の一〇二四年秋号5ページに載っていますよ」と教えてくれた。その時、私は改めて自分の愚かさや、善人ぶつていた姿に気付かされた。

浄土真宗では、人は生まれながらに煩悩が絶えず起こり、自分の力では清らかな善人にはなれない存在であるとして、これを「罪惡深重のわが身」と説くが、その言葉はまさしく自分のことだと思い知らされた。

こうして迎える新しい年、母の言葉や歴史を忘れず、静かに平和を願つて、日々を過ごしていきたいと思う。

合掌

## 「さようなら山口栄さん」

(西館記)

骨っぽい体格、長身の山口栄さんの目はいつも遠くを見て笑っています。

無類の母親っ子、どんない仕事が飛び込んできても、故郷の母の町への帰省は最優先、その日のためにはたらいているのですもの、とおどけていた姿が忘れられません。

今、存命なら72歳まだまだこれからというようにも思い、残念でなりません。淋しいです。

国立音大を出て、地域の合唱指導という仕事の傍ら作曲もこなし、それも楽しそうにこなしていらっしゃいました。落語が好きで、駄洒落、冗句、楽しい話を交え、指導する姿に知らず知らず乗せられて笑いながら、みんな大笑聲で歌うようになっていきます。

「いつもそんな大声で旦那を怒鳴りつけて……いえいえ、叱咤激励しているのですね。」と笑わせ、ボロンボロンと見事なピアノが続きます。

生き生きのびのびの合唱教室でした。大声で歌うこと、大勢で歌うことは相手を思いやること。全身で歌い全身で自分を表現すること、さあ声を張り上げて……



発刊された山口栄作曲集  
お問い合わせは日本子守唄協会まで

